

奉祝 栃木県誕生150年
菊水祭350年記念祭

明神さま

宇都宮二荒山神社



【紙本淡彩県庁新設祝賀之図】(菊地愛山筆作、明治19年[1886]、宇都宮市指定文化財、宇都宮市教育委員会蔵)

県庁開庁式に山車屋台が練り込む様子が描かれている

県民の歌

岡きよし 作詞
川島 博 作曲

- 一、とちの葉の風さわやかに
晴れたる町よいらかよ
男体は希望に明けて
日の光よみにみなぎる
栃木県われらの
われらのふるさと
- 二、鬼怒川の水きよらかに
尽くるなきさちよ恵みよ
生産は日ごとに伸びて
躍進のいぶきたくまし
栃木県われらの
われらのふるさと
- 三、人の和の夢おおらかに
盛りあがる自治よ自由よ
けんらんの文化にはえて
とこしえに若さあふるる
栃木県われらの
われらのふるさと

(昭和37年12月25日制定)

お祝いのごとば

歴史と伝統ある宇都宮二荒山神社の菊水祭が350年の大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

菊水祭は、二荒山神社の御加護で火災を免れたことに感謝し、江戸時代の寛文13(1673)年に催された行事に端を発すると伝えられています。流鏝馬や鳳輦渡御などが

栃木県知事 福田 富一



古式ゆかしく行われ、多くの人々が参加する宇都宮市のにぎわいあふれる伝統行事となっております。

く敬意を表します。また、本年は、明治6(1873)年6月15日に、当時の栃木県と宇都宮県が合併し、おおむね現在と同じ県域の栃木県が誕生してから、150年を迎えたところであり、県民の皆様とともに、この大きな節目を迎えられたことを大変うれしく思っております。

栃木県誕生150年を機に、改めて県民の皆様と、とちぎで生まれ、育ち、暮らす喜びや誇りを分かち合うとともに、伝統文化を守り育てつつ未来に誇れる「新しいとちぎ」づくりを県民一丸となつて取り組んで参りますので、引き続き御協力、御支援を賜りますようお願い申し上げます。菊水祭350年のお祝いのごとばと致します。

お祝いのごとば

この度、本年度で350年を迎えられます菊水祭が斎行されますことを、心からお喜び申し上げます。

この特別広報によって、ふるさと宇都宮に対する誇りや愛着が一層高まることを願っております。

はじめに、近年のコロナ禍によつて、二荒山神社の各行事が中止や規模縮小を余儀なくさ

宇都宮市長 佐藤 栄一



れた中、伝統を守り伝えるために御尽力をされた皆様へ、深く敬意を表します。

さて、本年7月に行われた天王祭では、「親子神輿対面神事」・「須賀神輿渡御」が4年ぶりに斎行され、市民の伝統行事を受け継ぐ熱意やまちなかでの活気を大いに感じたところでありました。そして10月には、寛文13年(1673年)に始

まった、例大祭「秋山祭」の付け祭りとして行われる「菊水祭」が斎行される予定であり、古き良き伝統行事として現在まで受け継がれております。また、本年は栃木県誕生150年を迎える節目の年に当たりますことから、県内各地で記念行事が行われ、盛り上がりを見せております。本県が100年先も発展していく

ためには、県庁所在地であります本市の発展が不可欠であると認識しておりますので、今後も本市が魅力あふれるまちとして発展していくよう、皆様からの更なる御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。結びに、二荒山神社の伝統ある祭事が未来永劫引き継がれ、ますます御発展されますことを祈念申し上げます。

栃木県誕生の経緯

明治2(1869)年2月、明治新政府は旧幕府領を日光県として新設し、下野国内のほぼ半分を治めていました。

明治4(1871)年7月の廃藩置県では、日光県のほか十の藩が新たに県となりましたが、この年の11月に下野国の南西部と北東部に分かれる形で栃木県(第一次)と宇都宮県にまとめられます。

そして明治6(1873)年6月15日、宇都宮県が栃木県に合併され「栃木県」(第二次)が誕生しました。



高橋由一による石版画「栃木県庁ノ図」(明治18年、那須塩原市那須野が原博物館蔵)

菊水祭三五〇年 江戸時代から続く祭礼文化

宇都宮市文化財調査員

池田 貞夫

菊水祭は寛文13年(1673)から始まった、宇都宮二荒山神社例祭(秋山祭)の付け祭りが起源とされる。氏子町が主体となつて、祭礼に山車や人形屋台、武者行列などの練り物を練り出すようになったのである。宇都宮城下38町(後に39町)が参加し、1番馬場町から38番小伝馬町まで、氏子町の順番



「日光山大明神御祭禮繪巻」(部分、弘化4年、崎尾家蔵)

に基づいて出し物の奉納巡行が行われた。付け祭りは江戸時代を通じて隆盛を極め、江戸の天下祭り(山王祭、神田祭)に匹敵するほどの大きな祭りに発展した。絶頂期の弘化四年(1847)には、39の氏子町から趣向を凝らした山車や彫刻屋台、芸屋台、花屋台、飾り物、学び(仮装)など、81種の出し物が出た。特に馬場町、大工町、日野町、池上町などの町内は、山車と彫刻屋台に加え、芸屋台を出す盛況ぶりであった。山車(出シ)は30台、彫刻屋台(家体)は21台を数え、また芸屋台は12台練り出された。芸屋台の舞台では常磐津、清元、富本の各流派の語りや三味線に合わせ、手踊り狂言が上演された。この時出演した芸人は、当時江戸で活躍していた一流の芸人たちであり、上河原町では芸屋台上演のために浄瑠璃正本まで作成しており、江戸と同等の華やかな文化が開花していた。

明治期に入ると、菊水祭は神輿渡御を中心とした祭礼に変化し、新たな町が参加して山車、屋台が練り出された。ちなみに明治17年の神社社格回復臨時大祭では33余町が、また同年の県庁新設祝賀行事でも40町が、自慢の山車、屋台を練り出している。更に大正2年の祭礼(新天皇御即位奉祝)では、自由行動で参加する町もあり、実に52の氏子町が祭りに参加した。山車に加え造花を飾り付けた花屋台が数多く練り出され、神社広場及び周辺は人の波で溢れ、空前絶後の祭りと呼ばれた。昭和期になると日中戦争の影響を受け、付け祭りは衰退、昭和20年の宇都宮大空襲によつて大半の山車、屋台が失われた。戦後の付け祭りは、焼失を免れた山車・屋台及び新たに造られた屋台が、一時的に出たが、往時の勢いは無くなった。

しかし平成26年に、市民まちおこしグループ「宮のぎわい」山車復活プロジェクト」が、損傷していた新石町火焔太鼓山車を復元し、市街地に残る本郷町山車及び菊水祭ゆかりの祖母井西町山車(旧大町山車)や益子内町屋台(旧新石町屋台)の里帰りを企画し、約80年ぶりに本格的な付け祭り、山車、屋台の巡行が行われた。同プロジェクトではその後も、南新町下組桃太郎山車、大黒町花屋台、茂登町日本武尊山車を復元しており、祭礼文化の復興が図られている。現在市街地には復元したものを含めると、9台の山車、屋台が揃っている。



菊水祭山車・屋台巡行復活(平成26年10月)

寛文12年 (1672)	日野町より失火したが曲師町は類焼を免れたため、宇都宮大明神に報賽のため、冬渡祭に子ども唐人踊り、提灯を奉納
寛文13年 (1673)	春渡祭に各町から提灯が奉納
同年	各町の出し物を秋の例大祭の付祭として行う。38町から山車・屋台・旗が奉納され、付祭が始まる
延宝3年 (1675)	延宝元年から毎年付祭が行われる
延宝5年 (1677)	この年から隔年の付祭が行われる
正徳元年 (1711)	付祭に小袋町が加わり、付祭礼町は39町に、60種の出し物が出る
享保4年 (1719)	山車が華美になる。人形屋台、芸屋台、職などが繰り出す(39町)
享保16年 (1731)	寛文13年以来、59年間に32度の付祭を行う
天保2年 (1831)	町奉行所より秋祭りの触れ書が発せられる
弘化2年 (1845)	蓬萊町屋台が建造される(現存)
弘化4年 (1847)	付祭の行列が絵巻に描かれる(崎尾家蔵)
嘉永2年 (1849)	付祭に山車・屋台が繰り出す
嘉永5年 (1852)	伝馬町屋台が建造される(現存)
安政2年 (1855)	付祭に山車、屋台が繰り出す
安政5年 文久3年 (1858)	「宇都宮二荒山祭礼図絵」が描かれる(神社蔵)
1863	
安政6年 (1859)	付祭に山車、屋台が繰り出す
慶応3年 (1867)	付祭の行列が絵巻に描かれる(増淵家蔵)
慶応4年 (1868)	戊辰戦争で宇都宮城攻防戦で、社殿焼失

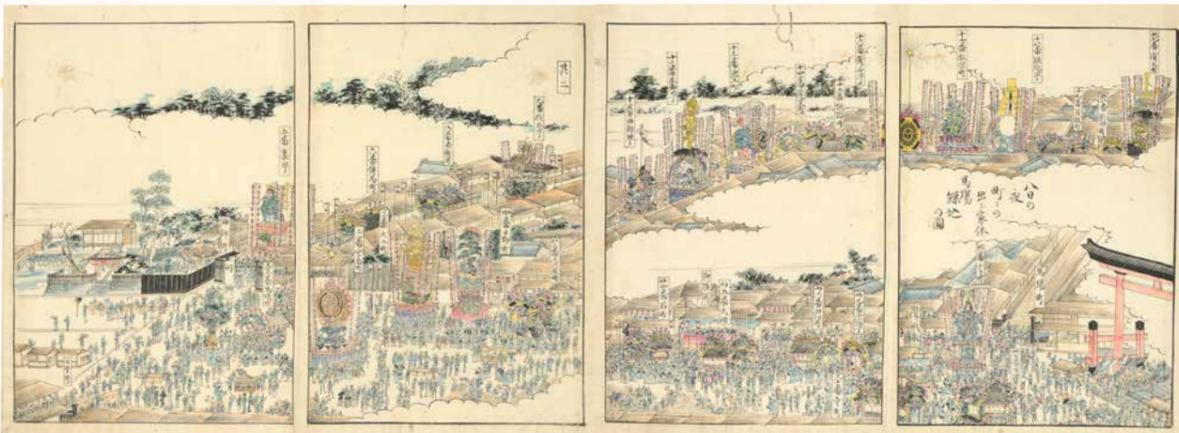


下野 宇都宮 宇都宮御祭

「東之方」右より9番目拡大

宇都宮御祭(菊水祭)は江戸の山王祭、神田祭などととも東国祭礼の最上十指の一つに数えられる盛大な祭礼であったことがわかる

「諸国御祭礼番附」
〔竹熊手六〕所収、徳川林政史研究所蔵



祭礼の中日にあたる旧暦9月8日夕刻、各町の山車と屋台が明神馬場に勢揃いする様子が描かれている
(宇都宮大明神祭礼絵巻 [宇都宮市指定文化財：宇都宮市 高橋家蔵])



新石町(十六番)による楽太鼓山車
(日光山大明神祭礼絵巻 [弘化4(1846)年、宇都宮市 崎尾家蔵])



伝馬町の山車が今小路門から宇都宮城へ入る様子が描かれている
(宇都宮大明神祭礼絵巻 [宇都宮市指定文化財：宇都宮市 高橋家蔵])



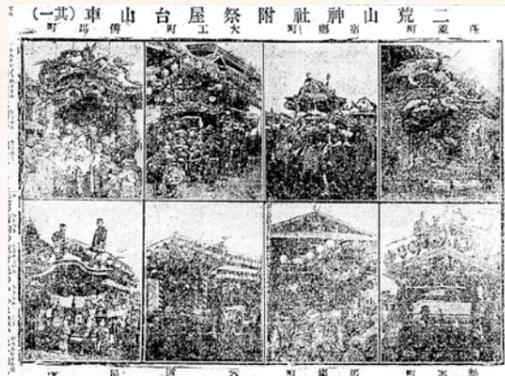
茂破町(十九番)から寺町(三十番)までの祭礼行列 (日光山大明神祭礼絵巻 [弘化4(1846)年、宇都宮市 崎尾家蔵])

材木町(九番)から蓬萊町(十四番)までの祭礼行列 (日光山大明神祭礼絵巻 [慶応3(1867)年、宇都宮市 増淵家蔵])

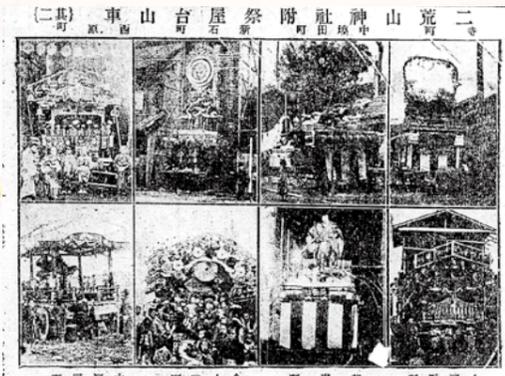
旧暦九月大湯の祭り行列と御祭礼の行列 御神馬の後に流鏝馬の射手4騎が続く (日光山大明神祭礼絵巻 [弘化4(1846)年、宇都宮市 崎尾家蔵])

4

3



大正2年、大正天皇の御即位を奉祝し行われた付祭に出席する各町の屋台・山車を写真で紹介
〔下野新聞〕大正2〔1913〕年10月29日付



〔下野新聞〕大正2〔1913〕年10月30日付

コラム② 県庁敷地と中里家

明治15年1月に栃木県庁の宇都宮移転が正式に決まると、どこに庁舎を建てるかという問題がありました。宇都宮への県庁移転請願運動では、県庁舎の敷地提供を申し出た人たちもいましたが、最終的に埴田村二里山（現・宇都宮市埴田1丁目）に決まります。

県庁敷地となる自らの土地を寄贈したのが、代々当社神官を務めた中里家というのはいま知られていません。この時の当主は中里千族（1831～1915）で、戊辰戦争の戦火で焼失した社殿の再建に尽力したひとりです。また明治11年、連名で宇都宮への水道敷設計画をいち早く説いた人物でもありました。社殿の焼失、社格問題で揺れた宇都宮の再建を強く思っている行動と言えるでしょう。



当社裏手から撮影された建造中の初代県庁
〔栃木県新道写真〕第十二号、上基文七郎撮影、那須塩原市那須野が原博物館蔵

- 明治4年（1871） 神社が国幣中社に列せられる。廃藩置県により、宇都宮藩が宇都宮県となる。
- 明治6年（1873） 神社が突如、県社に降格となる。
- 明治10年（1877） 宇都宮県が栃木県管轄となり、栃木県が誕生。
- 明治12年（1879） 大祭礼が復活し、維新後初めて付祭が行われる。
- 明治13年（1880） 26町から山車、屋台、手踊りなど、出し物が数多く登場する。太陽暦採用につき、社祭日を改めた。
- 明治14年（1881） 流鏑馬又菊水祭 旧暦九月七日ヨリ九日迄改十月二十七日ヨリ二十九日迄。
- 明治16年（1883） 社殿（現在のもの）を再建。
- 明治17年（1884） 各町々より山車、屋台、踊り屋台の外、東京より清元太夫を呼ぶ。
- 明治22年（1889） 鳳輦を新調し、この年より渡御が行われる。
- 明治23年（1890） 本郷町「神功皇后の人形山車」が建造される（現存）。
- 明治41年（1908） 5月、社格が国幣中社に回復。
- 明治42年（1909） 1月、県庁が栃木から宇都宮への移転が正式決定。
- 明治43年（1910） 3月に社格回復を祝す臨時大祭33余町が山車、屋台を練り出す。
- 明治44年（1911） 10月に県庁移転記念祝賀会40町が山車、屋台を練り出す。
- 大正2年（1913） 大正天皇御即位の奉祝。44町から山車、花屋台の行列が練り出す。自由行動で参加する町もあり、その数は52町空前の賑わいとなる。
- 大正4年（1915） 大正天皇即位式。8町が山車、花屋台、踊りを出す。



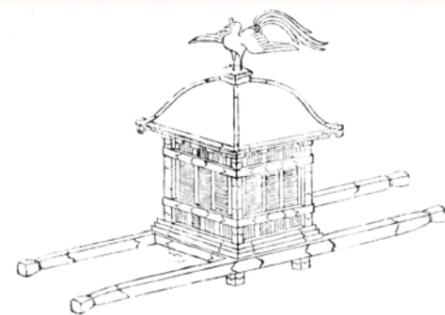
鳳輦の上町渡御（〔下野新聞〕昭和5〔1930〕年10月29日付）



鳳輦の大通り渡御（昭和9〔1934〕年）



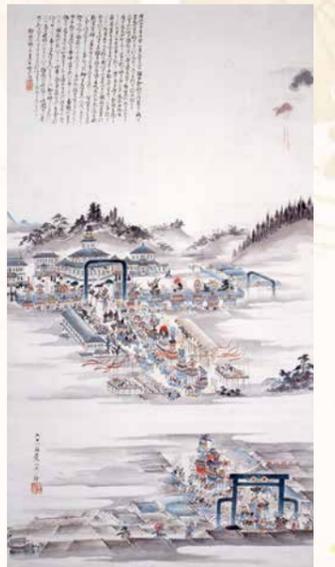
戸祭町の花屋台（昭和9〔1934〕年）



鳳輦（ほうれん）の図（明治13年の新調の際の木版画）



鳳輦渡御を毎年巡行することを河内部長へ届け出た「二荒山神社年表紀事略」
（明治13〔1880〕年9月29日、当社蔵）



〔紙本淡彩県庁新設祝賀之図〕
（菊地愛山作、明治19年〔1886〕、宇都宮市指定文化財、宇都宮市教育委員会蔵）

コラム① 社格回復運動

明治4年5月、太政官（明治前期の最高官庁）は当社を「国幣中社」に列します。ところが明治6年2月、当社は突如「県社」に降格となってしまいます。戊辰戦争により焼失した社殿の再建を行う矢先の出来事でした。

これに対し、当社神官の戸田香園と元宇都宮藩家老で氏子総代の縣信緝は社格の回復を再三申し出ますが、所轄の内務省は認めません。明治13年12月、社格回復を誰よりも望んだ縣が道半ばで亡くなります。縣の遺志を受け継いだ宇都宮町内の有力者をはじめ、社格回復運動を展開した結果、縣が亡くなった1年半後の明治16年5月に当社が国幣中社に復活。当社をはじめ、宇都宮町内10年余の念願が実を結ぶこととなりました。



当社鳥居前に立つ「国幣中社二荒山神社」の石柱（大正末期、〔石敏夫コレクション〕 絵葉書が映す下野の明治・大正・昭和） 随想舎より

「祭礼熱狂の氏子」明治八年十月の祭礼

「祭礼熱狂の町々の氏子は、綾羅錦繡として眩せんばかり、遠郷近村四方より来る男女雑踏して、数日賑ひ、往昔、享保文化の大祭礼に彷彿たるものがあつた。」（宇都宮誌）

「管内一等の祭典」明治十二年十月の祭礼

「各町くより坂鉾・山車其他年番の附祭りや踊り屋台に、徒歩躍り、思ひくの仕組にて、東京より態々呼び下せし清元延寿大夫を始めとし、歌沢・長唄の大夫其の他はやし連中、躍り見ども数十名、新粧目を驚かす計り、市中は揃への衣装、芸妓の手古舞などに至るまで、二荒神社へ一番より三十六番まで順番に練り込み、市中見物の群衆は山のごとく、軒燈は昼を欺くがごとく、管内一等の祭典でありましたとのこと」（栃木新聞）

「ひっくり返えるような大祭礼」明治十七年三月の社格復格臨時大祭

「気の荒い氏子が勢揃ひした上に、見物の群衆が殺到したんだから、小さな子供や婦女など人の波に踏みつぶされるやうな騒ぎを演じ、朝から晩まで未曾有の大賑わひ、高さ一丈余のダシが悠々と氏子に引かれて、笛太鼓の音も浮々と町を回り廻った。その麗らかなこと、豪華なこと、まさに千金の値のある絵巻ものだった。二度と今後は到底見られまい。」（下野新聞）

昭和3年 (1928) 昭和天皇即位奉祝本郷町など12町が山車、花屋台を練り出す

昭和9年 (1934) 当番町を中心に16町が山車、花屋台、囃子、手踊りを練り出す

昭和10年 (1935) 15町が山車、囃子を練り出す 呼び物の花魁道中が練り歩く

昭和15年 (1940) 菊水祭が行われ、流鏝馬と神輿の渡御の行列が練り歩く

昭和20年 (1945) 宇都宮大空襲(7月12日深夜)により市内が焼け、大半の山車、屋台を失う 終戦(8月15日)

昭和22年 (1947) 菊水祭が復活流鏝馬と神輿渡御の行列が練り歩く

昭和29年 (1954) 宇都宮市新庁舎落成・町村合併祝賀行事に、15町の山車、屋台が練り出す

昭和33年 (1960) 牛車を新調し、鳳輦を奉安して渡御を行う

昭和43年 (1968) 明治百年奉祝菊水祭渡御に際し、大工町が屋台を引き出す

昭和47年 (1972) この年のみ牛馬不足のため、鳳輦渡御は車両で行う

昭和51年 (1976) 市民のまつり「ふるさと宮まつり」が始まる

同まつりに伝馬町屋台、蓬萊町屋台、大工町屋台及び本郷町山車が市内を巡行

平成7年 (1995) 菊水祭の祭日を変更し10月最終土日曜日に斎行とする

神輿保存会が鳳輦奉昇奉仕を開始する

平成8年 (1996) 菊水祭に市制百周年うつつのみや流鏝馬を斎行する

平成26年 (2014) 菊水祭に合わせ、80年ぶりに山車と屋台の本格的な巡行が復活 新石町火焔太鼓山車や里帰りした益子内町屋台など、大小7台の山車と屋台が市内を巡行する

令和元年 (2019) 菊水祭に御大典奉祝うつつのみや流鏝馬を城址公園で行う 火焔太鼓・桃太郎山車が展示される 11月に御大典を奉祝して、鳳輦・須賀神輿・太鼓神輿の連合渡御を行う

令和2年 (2020) 新型コロナウイルス感染症の流行が拡大 全国で祭りやイベントが中止となる

令和3年 (2021) 感染症対策のため、菊水祭は鳳輦を車両に奉安して2日間の渡御を行う

令和4年 (2022) 感染拡大のため、菊水祭渡御は中止となる

令和5年 (2023) 祭やイベントが本格的に再開 栃木県が誕生して150年となる

菊水祭が江戸時代よりはじめられて350年となる 10月28日・29日の2日間鳳輦渡御、流鏝馬神事を行う

菊水祭の式次第

毎年10月の最終土・日曜日の2日間、鳳輦渡御、流鏝馬神事を行う

- 【本社祭】 渡御巡行の奉告と氏子繁栄を祈願 (1日目は杉の葉神事を行う) (2日目は白菊・黄菊を献花する)
 - 【神霊奉遷の儀】 鳳輦に御霊代を遷し奉る儀
 - 【出御祭】 渡御出発の祭り
 - 【流鏝馬神事】 出発前、朝の流鏝馬
 - 【鳳輦渡御】 北地区廻り
 - 【昼休憩祭】 昼休憩の祭り、稚児舞奉納
 - 【鳳輦渡御】 南地区廻り
 - 【流鏝馬神事】 渡御帰還後、夕の流鏝馬
 - 【神霊奉遷の儀】 御霊代を本殿に奉遷する儀
 - 【還御祭】 渡御終了の奉告の祭り
- 2日目の祭典も同様に行う
上町(神社西地区)・下町(神社東地区)の渡御順は隔年
下町御渡では今泉八坂神社で休憩所祭を行う



鳳輦前で行った神賑奉納行事

新型コロナ流行下での車両による鳳輦渡御



菊水祭の行列 (昭和28 [1953]年)



菊水祭の行列 (昭和28 [1953]年)



車両に鳳輦を載せての渡御 (昭和47 [1972]年)

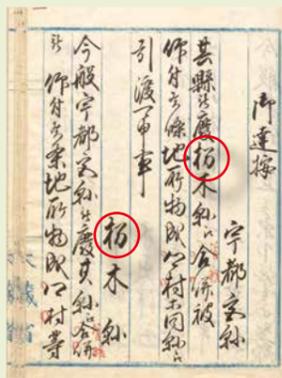


牛車による鳳輦渡御 (昭和49 [1974]年)

コラム③ 「とちぎ」の由来

「栃木」という県名は、明治4年11月に誕生した「栃木県」(第1次)で県庁所在地だった「栃木町」に由来します。「とちぎ」という地名の語源については、①「十十木節」、②「トチノキ説」、③地形に由来する「崩壊地名説」、④「遠津木説」の4つの説があります。

とりわけ④については、古代下野国を治めた下毛野氏の先祖であり、当社御祭神である豊城入彦命に由来するという説です。ここからさらにいくつかの説があり、木の国(栃木県)と紀の国(和歌山県)を区別するため命名したという説、命の母親名である「遠津」にちなんで命名したという説、さらに命が太平山付近を眺めた時に故郷の紀の国に似ていることから「遠津紀国」と呟いたという説が残されています。



「府県合併之儀ニ付伺」に記載された宇都宮県廃止に対する布達案(明治6年)。当時は国字である「栃」が使われていたが、統一されていなかった(『公文録』第百二十六巻「大蔵省伺(三)12、国立公文書館蔵」)

「賑う菊水祭—秋晴れに多数の人出」昭和二十二年の戦後復活 「宮の氏神二荒山神社の例祭菊水は二十七日夜中雨があったので気づかれたが、二十八日は、カラッと晴れた絶好の祭り日和、伝統の『やぶさめ渡御行列』があり、近郷近在から老若男女がくり出して賑わった。」(下野新聞)

宇都宮に現存する山車・屋台

江戸時代より明治、大正、昭和と各時代の祭礼の賑わいをつくりだしていた多くの山車・屋台は、戦火による焼失や他の地域への譲渡によって、現存するものは数基になっています。



蓬萊町の屋台 江戸時代



伝馬町の屋台 江戸時代
10月29日収蔵庫開放



本郷町の人形山車 明治時代

山車復活プロジェクトなど市民有志の活動により復元復活した山車屋台

令和5年10月29日(日)城址公園で展示予定



大黒町花屋台 令和元年(2019)



南新町下組桃太郎山車 平成28年(2016)



新石町火焰太鼓山車 平成26年(2014)

日本武尊山車は栃木県誕生150周年を記念して、10月27日まで県庁一階県民ロビーにお披露目展示されています。



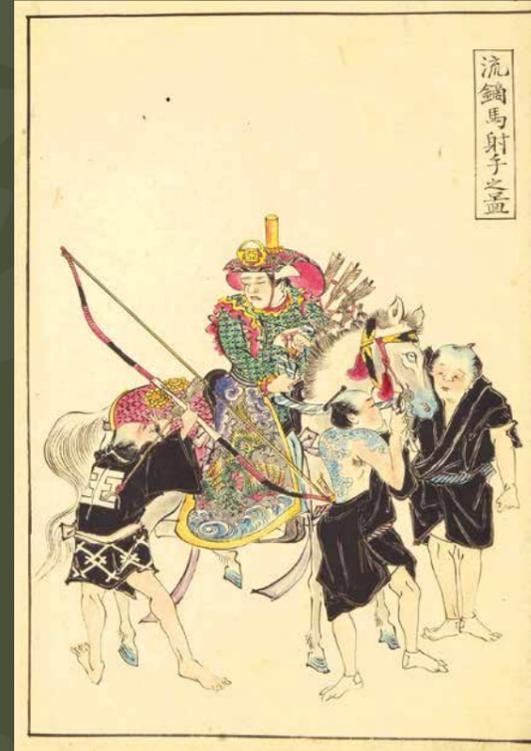
茂登町日本武尊山車 令和5年(2023)



剣赤熊の町印 令和元年(2019)

菊水祭と流鏝馬

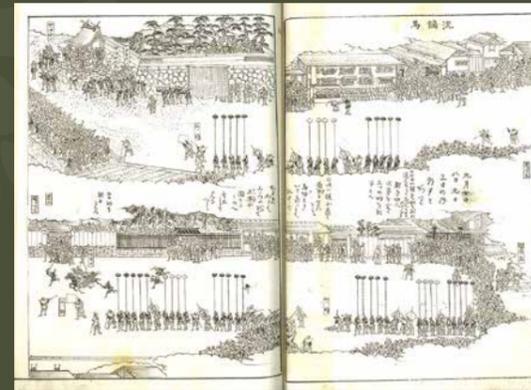
宇都宮の流鏝馬は鎌倉時代より始められ、中断を経て江戸時代に復活され菊水祭とあわせて行うようになりました。
本来の流鏝馬神事は、神社南側の釜川に架かる御橋より石段下までの馬場に、三つのを設けて馬を馳せ矢つがえてして順次射る形式ですが、現在は大鳥居内に馬場を設け一つの射るのみとなっています。
地名の「馬場通り・バンバ」はこの流鏝馬が行われる馬場に由来するもので、現代でも古式ゆかしい装束に身をつんだ射手が乗馬にて騎射を行い、鳳輦渡御への供奉が行われ、江戸以来の歴史と伝統が護り伝えられています。



流鏝馬射手の図 江戸時代
「宇都宮大明神祭礼図」(高橋家蔵)



令和御大典を奉祝して行った宇都宮城址公園での流鏝馬 (令和元年 [2019])



流鏝馬馬場の図 江戸時代
「二荒山神社祭礼図絵」(当社蔵)



宇都宮市制100周年を記念して行ったバンバ通りでの流鏝馬 (平成8 [1996]年)



昭和30年頃の流鏝馬



現代の流鏝馬神事

奉祝 栃木県誕生一五〇年

菊水祭

三五〇年記念祭

【祭典日】

令和五年十月二十八日(土)

二十九日(日)

● 県民市民安寧祈願祭

二十八日 本社祭に併せ齋行

● 鳳輦流鏑馬行列渡御

二十八日(土)上町地区

二十九日(日)下町地区

● 流鏑馬神事

両日、朝夕二回大鳥居内

● 山車屋台展示(宮のにぎわい山車復活プロジェクト)

二十九日(日)宇都宮城址公園

午後一時より午後三時

「新石町火焰太鼓山車」「南新町下組桃太郎山車」

「茂登町日本武尊山車」「大黒町花屋台」展示

菊水祭渡御順路図

● 渡御日程

時間	祭典	場所	時間	祭典	場所
8:00	本社祭	本社	12:00	昼休祭	鳥居内
9:00	出御祭	鳥居内	16:00	還御祭	本社

● 休憩所

上町：松原通り・境町・花房公園・昭和通り
 下町：八坂神社・本丸西部

問い合わせ：二荒山神社社務所 ☎028-622-5271

※通過する予定時刻は前後する場合があります

神社の情報をこちらでも

神社ではインターネットなどでも
情報提供をしています。ご参照ください。

お問い合わせ／社務所 ☎028-622-5271(午前9時～午後4時)

ホームページ <http://futaarayamajinja.jp>



宇都宮二荒山神社

検索

スマートフォンなどでもご覧いただけます。



宇都宮二荒山神社[公式]
@futaarasan

令和5年9月「明神さま」二荒山神社社報 菊水祭350年記念祭特別号
発行所／二荒山神社 〒320-0026 栃木県宇都宮市馬場通り一丁目1番1号 ☎028-622-5271 FAX028-624-3204 編集 制作／有限会社随想舎 印刷／晃南印刷株式会社